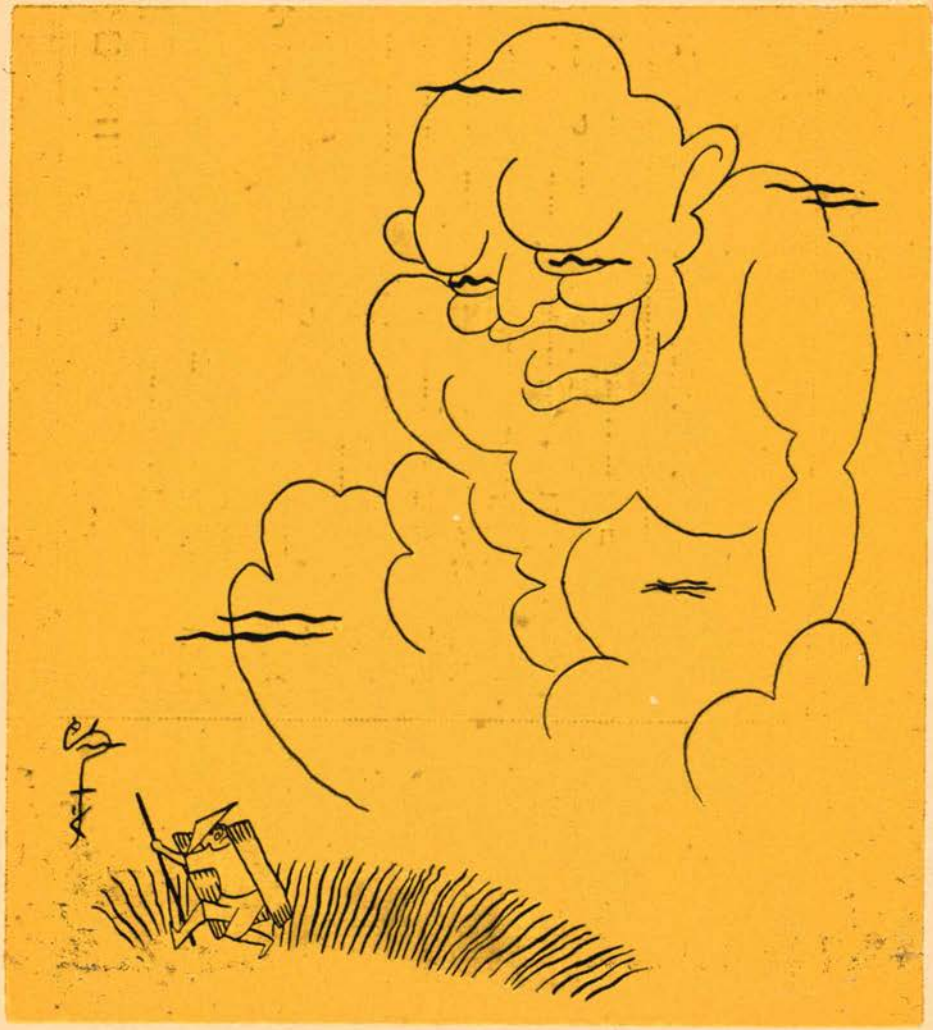
川柳雜誌

七月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十四年七月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌 第二卷第七號



川柳雜誌　第二卷　第七號（大正十四年七月一日發行）

目次

句作上の常套語（一）……麻生路郎（一）
玩具箱から……蛭子省二（九）
近作柳樽……麻生路郎選（四）
樂しみより出でて……林田馬行（一六）
川柳りりちゃんの會……會報……（一三）
梟の鳴く夜に……（一五）萬よし川柳……安川久流美（一八）
募句集句
履歴書……森東魚選（一八）
埃り……伊東夜叉郎選（一九）
床上げ……蛭子省二選（二〇）
逢戻り……塚崎松郎・森田輝翠共選（二一）
本社六月例會……二柳子記（二二）
新戎橋より……庄萬よし……（二〇）川柳家の戸籍調べ……遲日莊主人（二四）
川柳書架（四）……（二六）
川柳塔……雅幽、輝翠、莢豆、萬よし、一洲、徹底郎、柳路、葭乃、馬行、二柳子
編輯後記……（二九）
雲の峯（表紙畫）……吉岡島平……菖蒲園の句會……（二四）
近作……麻生路郎（一）

川柳雜誌

第二卷　第七號

近作

麻生路郎

呑ます氣でゐるに資本家ののしられ

それからは資本家呑ます事にきめ

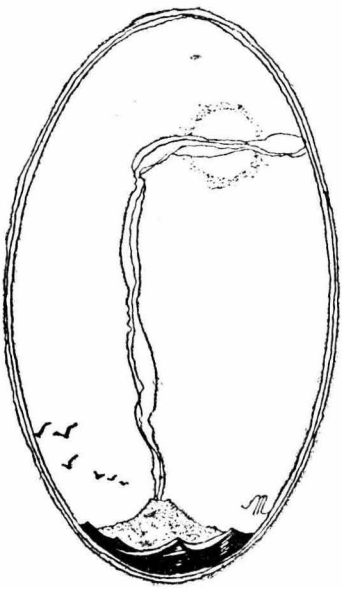
さて呑むとなれば資本家先に醉ひ

資本家にまだ呑むのかとあきれられ

資本家のくせに妾に借りが出來

眞つ先に歩く路郎は醉ふてゐる

萬よしにて五月廿五日夜



句作上の常套語（一）

麻生路郎

川柳の常套語に就て少しく書いて見たい。常套語といふ言葉が適切でないとすれば、川柳を作る上に、川柳の形を整へるために、川柳の締の繰りをするために、内容の意味をひきしめるために、或はゆったりとさせるために、よく使はれる用語に就てといふ意味に解釋して貰へばいゝ。

大體川柳の作句には俳句などのやうに、いろんな難かしい約束がない。それだけ表現の自由さがある譯であるが、一方には又あまりに自由たゝ、初心者は反つて據りどころがなくて困るものである。

そこで、前述のやうな句作上によく用ひられる用語を一々例句によつて初心者の參考に供したいと思ふ。

尤もそれ等の用語は、いくら大家になつても使はないといふ用語ではない。要はただ如何に巧に使つて句を生命づけるか、つけないかにあるのである。

（1）「事」で止めた句

昨年の八月、二柳子若こ金澤へ句行脚を試みしの歸るさ、山中の溫泉に立寄り　ある宿についた。

その宿の、すぐ裏手は　こんもりと茂つてゐる山だつたのである。宿のひゝといふものは全く所在のないものであるが、慰藉んじ各地の柳友に旅情をわかつための通信をかいてゐた。恰度その時にすぐ裏手の山の中から、あまりに突然に鐘の音が私の耳をうつたのである。

私はすぐに、

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

といふ句を詠んだ。この句の下五は『旅のこと』で結ばれてあるが、昔の句にも今の句にも、この『こと』で止めた句は隨分

澤山あるのである。勿論私は『こゝ』で止めやうなどゝ意識して作つたわけではないが、その場合々々に應じていろんな叙法が生まれて來るのである。初心者は何作練習のために、この『こゝ』を用ひて句を作つて見るのもよからうと思ふ。左に例句を擧げておく。

―― 昔の句 ――

おくたびれさてお内儀はひよんな事
（評）夫が旅から戻つた時その留守を守つてゐた妻が間男をしてゐたのを隣近所の者が諷した句である。

この雪に御太儀時にせんれい事
（評）雪の降るのに開いた親族會議、極道息子の親父の苦り切つた顏が眼に見ゆるやうである。

まつすぐな柳見てゐる暑い事
（評）これは説明するまでもないと思ふ。

人なみにいゝ春こいふつらい事
（評）この春といふのは新年のことである。

借りのある門で夕立むごい事
（評）情景が眼に見ゆるやうである。

賣喰ひを女衒の見込むごい事
（評）女衒は現今の娼妓紹介人のやうなもので、血も涙もない人間が多かつた。

目の上をぞり〳〵〳〵と惜しい事
（評）間男の女が人妻になつたので、岡燒連の心中を穿つた句。

いゝ降りだなぞと屋根船にくひ事
（評）ところは隅田川、この船の中は蠶者を積んでうれしいとこあの後家の珠數でぶつたは初手の事
（評）若後家の弱さを穿つた句。

女房の御機嫌を見て質の事
（評）「お前のあの丸帶と紋付を一寸融通してもいいだらう」と切り出すことを云つたもの。

―― 今の句 ――

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事　葭乃女
帳附やさかい女房に濟まん事　義矢滿
酒が名にしては忠勇野暮な事　かほる
淋しさは慕ふ人から金の事　馬行
絹物の父親痩せの目立つ事　輝翠
幸ひは乘客だけが無事な事　天魂
嘘ですよすぐ兄さんはおんな事　眠聲
葱を切る涙で嫁の無事な事　古城山
鮮人と膝つき合ふも旅の事　潮風
この地圖で見る日本の狹い事　二柳子
團體が鶯張りで鳴らす事　啞人
成り行きに委せ不孝の續く事　助六
全盛は杉植ゑつけた頃の事　雅幽
只顏の皮で笑つただけのこと　徹底郎
活きてゆくペンに手先の冷ゆること　蘆穂

昔の句でも今の句でも例句は幾らでもある。今の句に對しては評を省略しておいた。何れもいゝ句である。（つゞく）

近作柳樽

路郎選

待つてゐる女利久の裏を見せ　大阪　しげる
見晴しのこんなところあり一人旅　同　同
冠りに朝鮮人の髭もよし　同　同
没落のあはれに曇る窓硝子　同　同
順序よく話がはこぶ茶をよばれ　同　同
目くばせに一人一人の宰となり　同　同
俺ならと遠慮の要らぬ事をいひ　同　同
皆賣れて金魚屋桶の水をあけ　同　同
破れ傘の重みで歸る金魚賣　同　同
石段をむかへに降りる男の子　同　同
飛行機が見えなくなつて襯衣を干し　同　同
よく解りましたなと云ふ路次に住み　同　同
案外に氣安い人でまた訪ね　同　同

二階借夜店で買ふた花を活け　同　同
旅行團ゆうべの町を早く立ち　横濱　三拍子
大掃除未だ濕つてる道へ出し　同　同
遊ばしてくれる息子が慾しい年　同　同
支店も入れて染める手拭　同　同
風鈴屋宿屋へ着いて二つ賣り　同　同
看護婦の着飾つたのを淋しく見　同　同
子を叱るのに本當の腹を立て　同　同
廣告を信じる迄につかれてる　同　同
ブラリッと來たばつかりに使はれる　同　同
エプロンを取り母になり妻になり　同　同
醫者の來る其の日少うし心地よし　同　同
洗濯の音は日蔭の湯殿らし　同　同

○

惚合て水の流れて行く如し　鳴尾　莢豆
ちと念の入つたところをいやがられ　同　同
あの時の眼をしんじてるだけのこと　同　同
身賣りする女を笑ひ得ないのだ　同　同
支那酒のずるずる廻る深情け　同　同
國許に阿呆げな阿呆げな母一人　同　同
こもすればずるずる枕落ちんとす　同　同
麥は熟れ豌豆はしごけなくやつれ　同　同
寂光の蛙おののき堪ねがたし　同　同
寂光の蛙みるみる眼を皿に　同　同
親切にされてはゐない夢をみる　同　同
言つたこと仕たこといやに成る日なり　同　同
抱いてやると云へば逃てく女の子　大阪　竹榮
ほろくそに叩いてバナヽ又賣れる　同　同
通り庭ちと下駄箱が大きすぎ　同　同
舞妓もう疲れたやうに座るなり　同　同
バスケット提げて出稼戻つて來　同　同
よし向ふがおごると云つたにもせよ　同　同
かたづいた同士車内でふと出合ひ　同　同
自殺までしてわびるには及ぶまい　同　同

渡舟乘つた一人が時間聞き　同　同
だんぢり父落付いて飲むばかり　同　同
馴染客ほつとかれてるやうに見ね　同　同
あんな歌娘はかけで唄つて見　同　同
手水鉢蜻蛉が一羽死んで居た　旭川　志貴南
會見の意味を果さず醉ひつかれ　同　同
新參の丁稚倉庫へ近寄らず　同　同
ブローカー金庫ばかりに金をかけ　同　同
明るみへ出ても昔の娑婆でなし　同　同
結局は死んだら御氣に召すだらう　同　同
札束で打たれ番頭泣き笑ひ　同　同
里歸り娘の時の膳で食ひ　同　同
眞劍に嫉妬てる儘の美しさ　同　同
雪達磨少し歪んでドンが鳴り　同　同
十八九其の幻の走馬燈　同　同
そんな事及びもつかぬ好い話　大阪　乾坤
會ふて遺るやうに待たせる應接間　同　同
兎も角もやつて見る氣を不安がり　同　同
それとなく催促をする弱い金　同　同
知つてゐる筈と新妻引合はせ　同　同
呼捨てを嬉しく思ふのも女　同　同

催促をするまで抛つて置く氣なり　同　同
うたゝねを只うつむくも女なり　同　同
屈かない背中を搔くも長煙管　同　同　同　豐中　馬行
川向ひ石屋眞畫の石を打ち
貰ひ子へ思惑のある舞扇　同　同　同　同
逢ふてゐる前をボートの二三艘　同　同
慾得もないほゞ母は眠たがり　同　同　同　同
眞夜中にあなたと云へば芝居めき　同　同
噴水へちら〳〵銀のやうな月　神戸　美代子
失職のまゝの帽子で春も過ぎ　同　同
まだ時間あるわ鉛筆けづりませう　同　同　同
兒に云はず兒の事で母易を訪ひ　同　同
時計まで私まだ〳〵脊がたらず　同　同　同
友二人死んだ男の事で更け　同　同
あゝ私また級長にされたのよ　同　同　同
事のある度に書棚の本が減り　同　同
先生の留守お蠶の箱を出し　同　同　同　室蘭　愚劣
こうしては居れぬ履歴書認める　同　同
ラヂオだと兄いさん火箸さかにさし　同　同　同
雄と雌それが玉子でわかるかい　同　同
あら雲雀やつばし雲の上で啼き　同　同　同
ごつちもの腹に這入つて泣かされた　同　同
わるいとは知りつゝ豆の葉をちぎり　同　同　同
黑雲のそれにも似たる心にて　同　同
まあ土筆取ろとてあんなすべりやう　同　同　同
析が折りて相濟ぬ嘘をつき　同　同
あらあなたかて見てごらんお福だわ　同　同　同
縫ひながら聞き洩らさないいゝ話　同　同
タクシーでドヤ〳〵〳〵と御一族　大阪　萬よし
少しづゝ八百屋品數よけい持ち　螢ケ池　露斗
青葉若葉親父は今日も車引き　同　同　同
御病氣の程度で貯金出すつもり　同　同
醉ざめは羊のやうな若旦那　同　同　同
いつまでも金が旦那にしておかず　同　同
一年生只今の聲改まり　同　同　同
いづれこうなるも算盤玉のうち　同　同
叩かれた拍子に旨い輕口屋　同　同　同
刑事室じは〳〵白狀さすつもり　同　同
思はぬでないがこちらも痩世帶　同　同　同
もう娘餘程あぶない頃の年　同　同
見てる間に儲かるやうに口入屋　同　同　同　松江　不二綱
薄化粧餘義なくしてるかたちなり

ゼンマイの汽車母親の膝へ着き　同　同
お迎ひが來て隱れん坊そのまんま　同　同
其の間の事情親分丈けが知り　同　同
雨の降る日は内職の手を助け　同　同
おばちやんと呼ばせて藝者嬉しがり　大阪　凡平
洋食を兄の通りに食ひ終り　同　同
結界に坐つて居ればすむ養子　同　同
君が行くなら僕も行く芝居　同　同
二三日妻の脫いだり重ねたり　同　同
あらいやだお嫁さんなどゝ十五六　山口　吐露樓
ね、ね、ね、ね、と戀人に又乘ぜられ　同　同
刻々と儲かつて行くビルヂング　同　同
古新聞こんな事件は知らなんだ　同　同
籐椅子を持ち出して來てもう五月　同　同
カルピスを一ト口呑んで呆れ果て　東京　盜泉
いくらでも貸してやらうと嫌がらせ　同　同
屋根裏で春立つものゝ芽を憎み　同　同
嬉しくはないときつぱり云つてのけ　同　同
米吳れと云ふても行けずおちぶれる　神戸　神戸
父の顏汚ごさぬ子にと子を育て　同　同
電報に書生重たい門を開け　同　同

初戀のあの頃してた帶を見せ　同　同
心天涼しく光る皿の上　同　隨帖
戸をしめてからの博奕に一人ふゝ　同　同
歸省するやうな家出のバスケット　同　同
めぐまれぬ二人は家出さゝ出來ず　同　同
この爪を切つてはならぬ手内職　大阪　悟郎
見送りに抱かれ子供はよく笑ひ　同　同
借りに來た顏を旦那に見透かされ　同　同
祝盃を夫人半分ほどさゝげ　同　同
厄介なものを隣へこそずかり　堺　佳鳴
借りて來た事は女房へ云はぬなり　同　同
俺と云ふ者を無視した裁き方　同　同
今起きた姿で妾買ひに來る　同　同
冗談を出戻り少しむつとする　下關　一滴
料理法本とは別な味が出來　同　同
打ちとけた話ごつちも横になり　同　同
逢つてから話さうといふ葉書が來　東京　助骨
好意は有難いがと立上り　同　同
釣葱今年は避暑に行かない氣　同　同
肩揚も取つて大人のつもりなり　螢ヶ池　遁助
面會の時間ぎり〳〵母は去に　同　同

面會が殘して行つた良い香り　同　同
親爺もう子供を賴るやうになり　大阪　啞人
新刊と辨當箱と傘と持ち　同　同
この頃の唱歌聞いてる子煩惱　同　同
飴玉を頰張つたまゝ膳につき　同　柳人
空氣銃お書になつてまだ擊てず　同　同
生徒から見た先生の小さい家　同　同
今刈つた頭が春の雨に濡れ　大阪　元山
聞くうちにもう貧乏の愚痴になり　同　同
こちらから言ひ出したのが弱味なり　同　同
薄情な紐を車掌は二つ引き　螢ヶ池　屏三呂
あほらしいマタ一からの奉公口　同　同
不肖の子女給だけにはよくもてる　同　逸錢
ラヂオでは彌次られもせず無事に濟み　同　同
カロリーがどうのこうのと痩せてゐる　同　滿三留
あやまればこうもならずにすんだもの　同　同
あんじてるとこへ歸つて叱られる　大阪　山月
談判の心算で出たが飲まされて　同　同
稅金も出さずこつそり儲けてる　同　炭車
メートルを上げたお茶屋を踏倒し　同　同
それ其處だと器用に轉ぶ稽古臺　同　南汀

勉强にちと邪魔になる東西屋　同　同
かほど迄通ふつもりか若旦那　同　薫流
總踊りになると旦那は肩を脫ぎ　同　同
また俺の事かと襖あけて來る　同　蚊十
ウエーターの家を二人で探すなり　同　同
是れはたゞ世間の例を引いたゞけ　神戸　一休
切上げるつもり皆んなで流行唄　同　同
名前見て歳見て自由畫をほめる　同　嶺月
俄雨乘り越しをする事に定め　同　同
猫脊して慌てるやうに煎餅燒　同　濁水
敎へ兒に追つ駈けられて傘を借り　同　同
駈落に今終列車出たところ　大阪　眠聲
馳落はフェルト草履をはいてゐる　同　一路
此の人出また出直さう百貨店　同　廣賀
何所からか引つぱつて來た女房なり　同　のほる
板圍ひ向ひて女は待つとする　池田　默太
果太皷孫と隱居はあとになり　螢ヶ池　叟峰仙
乳母づきで育つたことを藝者いひ　三重　笑汲
こゝに又徹夜働く人を見る　兵庫　泣笑
線香の匂ひ流連吸はされる　神戸　南天棒
友人が無口になつた旅の雨　德島　三ッ葉
初對面なんだか怖いまゝ別れ　平壤　辰進子
權利附泥で上塗りしたばかり　臺灣　柳村

玩具箱から

蛭子省二

ポール國へ新聞や書物の書拔を容れて置きます。蓋に玩具箱とクレヨンで書てある。子供のない私共は此儘老ひてゆきます。川柳に全く緣のなき老親へ茶話の材料としてゐます。夫れを皆樣の御高覽に供するは過分の光榮であります。

（一）おびんずる

お賓頭盧嫌ぎうしたか腹をなで

淺草觀音にも御多分に漏れずお賓頭盧が結び兄跌して居る。參詣する大抵の女が撫で廻して居るが、目と腰をさすつて居るのが一番多い。上と下の照も面白い。自分共は腹撫でる程の信仰もない。佛罪で金もなし子も亦なしである。滑稽に感じたのはチバレ髮の或る種の女がおびんずるの頭を撫でゝゐた。よもや丸坊主になり度いと言ふ祈願でもなからう。アノ觀音さんの大本堂の賽錢函に卍字が刻まれてある。奥の大香爐にも萬字がついて居る。夫れを婦人がソット撫でゝは腹や前の方をさすつて居る。お鬢頭顱並に効驗あらたかなのであるさうな、卍字は十字の變化したものである。萬字十字倶に生殖器を意味するもの理窟は通つて居る。十字形で處女膜を破り操を神に捧げた習慣はある。

おびんずる地藏の短氣笑つてる

地藏さんも三度目に怒つたと言ふが、おびんずる同樣相變らず撫でられて鼻も缺けて居るのがある。子育地藏子安地藏逢には道樂地藏（遠紅）と云つて男女抱擁姿もある。

（二）三輪の神（大神神社の事）

舊事本紀に『大己貴神天の羽車に駕し虛空に飛びてあまねく妾を求む、時に節渡縣に下る。ひそかに大陶祇のむすめ活依玉姫に通ず。其往來の人の知る所にあらず。其女孕めり。父母あやしんで問ふて曰く、誰人か來れるぞ。女答へて曰く神人あり屋上より來りて共に枕を並ぶと、是に於て之れを顯はし見むと欲し針を苧玉卷に着けて神人の裝ひに懸けて其糸を認めて之を見る。明旦往くに從ひて尋ね見れば鑰の孔より節渡山を經て吉野山に入り三輪山に留まる。其綰ぬる所の糸三丸なほ遺れり。故に號けて三輪山と曰ふ』

元清作の謠曲三輪は三輪明神が里女となつて女賓僧都をたづね神樂を奏するもの、川柳には

杉の葉をよけ々々糸をたぐり行
蛇の道を女の知るは糸と針
三輪の神揚句のはては無心なり
三輪の神ちょつかな事でためさるる
元賓僧都なけなしを引つぱかれ

江談に『女賓洛陽を去つて他國に赴く間、道にて女人に來り會ふ。衣々脱ぎて是を與ふ女人之れを得て和歌を詠す。三の輪は清く淨きそ唐衣くるゝ思ふな待つと思はじ』

大神神社の境内には夫婦石、双本杉（今はなし）或は苧玉卷塚があつて緣組の信仰をつないで居る。

日本宗教風俗志に『三輪の町の南に綱越神社と云ふあり。こは倭迹迹日百襲姫命を祭る、姫は孝元天皇の皇女にて崇神天皇が姑に常らせたまふ。里俗傳へて崇神天皇の頃大己貴神夜々姫の家を訪ひ給ふ。一夜神に向ひて白晝一度駕を枉げたまひて其美貌を拜せしめたまへと請ひたまへば、神さらば明日姫が櫛笥の中に潜まむと約して去りたまひぬ。姫いぶかしく思ひて次の日櫛笥を開きたまへば、一頭の小蛇蟠屈して其中にあり、姫大に驚きて叫びたまへば、神形を現はして大いに怒りて汝吾を恥しむ吾汝を辱かしめむとて大虛に歩して三輪に登りたまひぬ。姫之れを恨みたまひて箸を以て〇〇を貫き絶命しまひぬといひ此神社を箸塚といふ事元より荒唐不稽なれ共、斯く信ぜられつゝあるは事實なり』

此三輪の神が大黑天と混合して、三輪大黑が生れたなどは思潮の盛勢が窺はれる。

（三）常念佛

此頃常念佛の研究をしつゝある（鯱鉾誌拙稿參照）木母寺及土手の道哲に常念佛堂がある。柳雨先生の御通信の一節に『常念佛堂木母寺にありこの御說にて私か兼て確信してゐた句解の一層確實ならしめたと思ふものがあり升。『田樂でしやれる向ふはカアンカン』は最初西方寺の道哲？として何かに一度發表したれど是は木母寺でなくては、向ふの田樂が聞ねぬと思ひ直し

て置きました。木母寺と眞先は殆んど向側になつてゐる』

常念佛聲が替れば近くなり　（武玉川三篇）

生ながら何にあはれて常念佛　（　同　）

假名世說に『寶曆の末淺草寺のほとりに、ありがた坊と異名をとりし僧有けり、本名は樂心といへり。此僧元よりつんぼうにしておふしなれば自性院といへる。地藏堂の常念佛の役に抱へられけり。結衆仲間にても件のかたわをあなどり、夜の番勤にのみあてけり。樂心は若にも思はず、元よりものいふ事もならねば終夜鐘をならして、ああ〳〵とのみいひてつとめけり。ある夜丑の刻ごろおぼしき頃、地藏尊御聲高く樂心々々と呼び給ふ。樂心はじめて耳に入りあいと答へ、又舌もまわれば有がたうござりますといふ。これよりものもいはれ耳もきこえて、今はよのつねの人に異ならず、唯ことばのあとさきに、有がたうござりますといふを口癖に云へば、有がた坊と異名をけり。

（四）焦。け。湯

道三の焦け湯を答に頂かぜ　（拙吟）

病者の自分は食もたれがするので、道三の焦け湯を毎朝呑む、拙吟は實感である。

汁椀をてんでにすすぐ馬喰町　（古句）

道三の焦け湯は藥である。汁椀で頂く所に面白味がある。馬喰町は椋鳥田舍者相手の旅宿。弦齋夫人の料理談に

夫人『……召上つてお腹が張つた時には道三の焦け湯と云つて御飯を炊いた時、お釜の底の焦けた處を湯で煮て少し鹽を加へて、其湯をお呑みになれば宜ろしう御座います。』

記者『道三の焦け湯とはどう云ふわけですか』

夫人『夫れは昔道三と云ふ名醫がありまして或る時二階から往來を眺めて居ますと、若い男が鼻歌を謠つて通りました。道三は萬事に注意する人ですから其聲を聞いて、ハテナ彼の若者の聲は大層濁つて居る。必ず惡食して腹中を損じたのだらうと家の人に話しました。すると盲の一時卽ち今の二時間許り過ぎて今の男が又鼻歌を謠つて前を通りましたが、道三は其聲を聞くと忽ち表へ飛び出して若者の袖を捉へたさうです。若者は驚いて道三の顏を見て居りましたが道三は、お前今何にか食べて來はしないか實はさつきお前が通つた時病人らしい聲を出してゐたが、今聞けば大層聲が澄んで氣分も快さうになつて居る。何を食べてきたか敎へて呉れろと尋ねました。若者は恐る〳〵ナーニ變つたものを食べたわけではありません。友達の處へ行つて河か食べさせろと云ひましたけれ共、飯を食つた後で何にもありませんからお釜の中を探して焦けた飯へ湯をぶつかけて一杯かつ込みましたと答へたさうです。そこで道三は御飯のお焦けを湯で煮て食べれば胃中を洗ひ流すと云ふことを悟つてそれから諸人に焦け湯を勸めた爲め、俗に道三の焦け湯と云ひ傳へてあるのださうです。』

本社六月例會

六月二十日
於端之坊

六月二十日夜、端の坊に於て本社六月例會を催す當夜の參會者左の如し（二柳子記）

路郎、紋太、古城山、輝翠、松郎、三巴、朝一郎、長人、世間亭、萬よし、ひろし、文久、波郎、わたる、秀哉、欣遙子、百石、凡平、乾坤、飯山、可兒人、凡痴、竹榮、眠聲、正坊、柳水、文露、聞路、二葉亭、かほる、突支坊、信かす、のぼる、炭車、一柳、佳鳴、鳶歩、山月、春篁、雅幽、松雨、馬行と私

婚（兼題）　路部選

刑事來て婚の年なご聞いてゆき　竹馬
婚四十にして未だ讓られず　新坊
定休の帳場に婚が獨りゐる　紋太
一と言で婚は將棋を止めて　飯柳水
終電に婚折詰を二ツ下げ　文久
時來れば婚代議士になる氣なり　三巴
婚といふ格で座敷へつき出され　世間亭
別居して婚は浮世が廣くなり　朝一郎
婚殿にするまぬ娘の家出なり　眠聲
婚なんぞ行くよ俺がよい平本　山美
ネクタイと云ふが似合ふ姉の婚　春篁
孫だいて思ふ去なした婚の事　ひろし
婚の親ザックバランにもの云ひ　松郎
ちと法螺も交ぜて岳父をなづかせ　萬よし
おとなしい婚へ天氣のつゞくこと　波郎
婚が來て商店の位置ちと變り　飯山
婚殿に云ひたい事のありはあり　一柳
種馬になつたと婚の手紙なり　鳶歩
番頭の眼に生ま白いだけの婚　正坊
定休日元の下宿へ婚が來る　同
あれこれの噂の中を婚は老け　凡平
親類が來て入婚を若くみる　同

黄昏　紋太選

黄昏にもうクレーブは乾てる　同
事務室へ仕事を積んで黄昏れる　秀哉
黄昏に亭主遠者で戻つて來　一柳
黄昏に煙たうなるも田舍也　かほる
黄昏の電車をおりて早い足　飯山
黄昏れて來る方へ塵掃き出され　松郎
蝙蝠と繩飛びの子へ灯が默り　路郎
黄昏の景色に牛も鍬もよし　世間亭
白足袋の運び黄昏せまつて來　同
黄昏の夜に杓子の威勢よし　文久
校門をまつたく締めて黄昏れる　同
黄昏の假橋ねむい灯がこもり　同

支店　松郎選

がら〳〵と開かる支店の臺所　雅幽
ひつそりこしてる支店の椅子の音　波郎
本店と違ふ支店の店飾り　古城山
停留所からちと遠い支店也　かほる
賣り出した支店の小僧借りられる　一柳
目出度さは支店へ子供生れたり　二葉亭
支店出してからはあんまり儲からず　のぼる
振り廻す名刺へ支店多すぎる　乾坤

奉加帳だいぶ汚れて支店へ來　飯山
支店には番頭の嫁が留守をする　春篁
白い齒を見せぬ支店の取締　文久
轉勤へちこおしまれる支店長　竹桑
支店まだ儲かる所までゆかず　凡平
本店は支店の割に小さすぎ　柳水
貸浴衣これが神戸の白木屋か　同
當分は支店へ來てる親旦那　正坊
開店に支店へ本家櫛掛り　同
ビルヂング支店支店の金文字　世間亭
上海の支店へチョッと行く道さ　同
找擢をされて支店を惜しく立ち　紋太
勉強家揃ひこ支店ほめられる　同
(佳)支店長の椅子だけ引いて今日もくれ　のぼる
(佳)支店長こは知らなんだ給仕なり　わたる
(佳)本店が思ひやられる支店なり　凡平
(佳)支店では開けた養子さんにされ　路郎
(佳)支店出てまもなくおつさん漕ぎつける　同
(軸)決算期支店も夜勤料を取り　松郎
同ストライキ通達ばかり支店へ來　同

瀧へ背を向けて撮した貸浴衣　路郎
瀧の客だけで暮して行ける茶屋　正坊
瀧の水全速力の氣味でおち　わたる
瀧こ見りや銀紙でさへ凉し見に　可兒人
女連れ雌ん瀧だけで引返し　柳水
一人減り二人減り瀧寒くなり　雅幽
二人連れ瀧から先へ氣が向かず　古城山
幾曲りするこ聞ゆる瀧の音　波郎
一刷毛で瀧に見にるか聞き直し　長人
紐のある羅間着で瀧のある所　文久
瀧の音聞く樹の根にけつまづき　秀哉
瀧壺を覗くに草鞋濕つて來　蔦歩
瀧壺を覗けば若葉ばかりなり　朝一郎
一筋に瀧だけ白く暮れ殘り　飯山
瀧へ來てみんなが下す尻からげ　松郎
瀧茶屋の中暗うみる通り掛け　同
双六の上りのやうな瀧へ着き　馬行
二三間バン屋の逃げる瀧しぶき　同

大臣

我黨の爲に大臣西下する　正坊
一平の筆大臣も異議はなし　三巴
大臣の生家こ云ふへ廻り道　柳水
大臣も女將の眼には唯の人　乾坤
旅へ出て大臣せわし猪口を受け　百石
そんなことまでは大臣知らぬなり　一柳
大臣に故郷すつかりかはつて居　秀哉
大臣になつて床屋が恐れ入り　雅幽
大臣をやめるこたゞの親爺なり　可兒人
速記者の上で大臣太い聲　のぼる
大臣の癖を速記者一つ知り　飯山
大臣はやめさへすれば事はすみ　世間亭
我地位を大臣或日考へる　松郎
大臣の明治維新を紺絣　波郎
通過驛大臣顔を出したゞけ　同
大臣の出た國であり灯がこもり　眠聲
又痴遊此の大臣も惡く云ひ　同
教科書で行けば大臣ばかり殖に　馬行
大臣になつてぼつ〳〵空こぼけ　同

散會するには未だ間があるので幽靈一句を課して五人抜きの競吟をした。滑稽な幽靈の續出で大笑ひ。近頃にない愉快な例會であつた。

幽靈

幽靈より太鼓の音でびつくりし　信かず　竹榮
標札を見て幽靈は這入つて來　鳶歩　柳水
幽靈を出して賴母子つぶれたり　炭車　世間亭
幽靈にもてあそばれて幕となり　のぼる　ひろし
贅澤な夜着幽靈は裾に立ち　三巴　幽靈の手引で敵討つて幕
豪傑に出逢ひ幽靈日を替へる　古城山　子を抱いて出る幽靈は泣てゐる　波郎
消えたかと見れば幽靈笑ふて居　飯山　幽靈の辛氣がつてる高鼾　松郎
幽靈に敵のありか教へられ　朝一郎　幽靈を有るものにする涼み臺　正坊
振り亂し見ぬ幽靈を思はせる　欣遙子　幽靈の影がうつゝた金屏風　路郎
看板と違ふ幽靈見て歸り　聞路
幽靈の去つた障子に風がゆれ　雅幽
幽靈の足が見えたとかぶり付　突支坊
名を呼ぶまでの幽靈脊が高し　文久
幽靈を攫り飛ばせば馬鹿野郎　紋太
高座では幽靈少し洒落を交ぜ　萬よし
お岩はん幽靈前の好い女　松雨
洋服の幽靈足はかくされず　可兒人
幽靈の腰からしは井戸にあり　眠聲
幽靈の姿減多に變へぬなり　凡痴
幽靈の眼にも後妻の美しさ　馬行
迷て出る女房は細い聲で泣き　竹榮
惚てる妓お岩の寫眞だけ持たず　柳水
幽靈になつてやると云て死んだ　世間亭
幽靈の手引で敵討つて幕　ひろし
子を抱いて出る幽靈は泣てゐる　波郎
幽靈の辛氣がつてる高鼾　松郎
幽靈を有るものにする涼み臺　正坊
幽靈の影がうつゝた金屏風　路郎

住吉菖蒲園の句會

大きな雪洞で不夜城のやうな住吉菖蒲園で六月二十七日午後六時から第十三支部の句會を催しました、土砂降りにもかゝはらず遠路の御出席を感謝いたします（多聞、双柳報）出席者（路郎、樂居、萬よし、風、かほる、秋葉、美の作、信かず、松雨、助六、二天、刀三、松郎、多聞、一路、双柳）

澁團扇（兼題）　路郎選

澁團扇誰が社長の顔を描き　美の作
手の平がちと痛うなる澁團扇　かほる
落籍されて初めて持つた澁團扇　秋葉
澁團扇清書を張つて干してあり　助六
去年より少し燒けてる澁團扇　刀三
無茶苦茶に樂書がある澁團扇　二天
婆さんの根氣を話す澁團扇　松郎

萬引　互選

刑事室解かせば長い女帶　美の作
下駄はいて今日も萬引無事に濟み　信かず
萬引は雲を霞と逃げぬなり　多聞
萬引は子持と見ぬ若さなり　萬よし
萬引の噂もあつた妾なり　樂居
いいネクタイがあると萬引見て通ず　刀三
萬引の目には好い柄ばかりなり　かほる
萬引をされたと知らずほたへてる　一路
萬引をあきらめておく棚卸し　同
萬引の合棒やられたなと思ひ　助六
萬引の今日もこつてり塗つて出る　同
萬引のあんなとこから襟が出る　二天
萬引をおさえた方は跣足なり　同
萬引は手品を習はふかと思ひ　松雨
萬引を亭主へそ操りかと思ひ　同
萬引きをした奥樣をこはく見る　双柳
萬引がほんよに買つた品も持ち　同
萬引は今夜の御飯煮いてなし　松郎
萬引はそれとして亭主考へる　同
萬引はハンカチ顏にあてたきり　路郎
萬引で進退何ひ出す夫　同

川柳 りりちやんの會

―遲日莊にて―

大きな眼をパツチリと明けたり、ちやんは、段々太つて來る。お祝ひをいただいた方に寄つて貰つて六月四日の夜にりゝちやんが川柳會を開くといひ出した。

火のつくやうに叫ぶので多分さうだらうと推察してパパとママが介添で松郎さんや二柳子のおつちやんのお世話で兎に角開會をいたしました。

參會されたおつちやん方は二柳子、芦穗、一洲、幸堂、雅幽、松雨、双柳、かほる、輝翠、刀三、松郎さんに路郎と葭乃。松雨のおつちやんが例によつて福引をして一同のお膳をよらせる。

それからお酒を呑みながらみんなで句を作り、餘興としてかほるさん(お國)松郎さん(五平)松雨さん(友之亟)の三人でお國五平の脚本朗讀やら、かほるさんのジヤパンダンスがあつてから松郎さんの落語「素見」、次でみんな隠し藝續出で大いにうれしがつた。俄にりりちやんが泣き出したのでどうしたのだと聞けば馬行、一聲、多聞古城山のおつちやんが來ないからださうな多聞のおつちやんからは「りりちやんのテはいちごにそまつてゐ」といふ句をかいた手紙がとどいた。

十二時近くにみんな顔だけが赤ちやんのお仲間になつて寄出度く散會いたしました。

(六月四日夜幹事記)

二柳子　お達者ですか久振り
一洲　兩親はお達者ですか久振り
双柳　兩親の手先が動き蚊も追はれ
雅幽　兩親は無事で居れと送り出し
芦穗　兩親が居て妹が起けてくる
松雨　兩親がもう俺にない膳を決め
幸堂　兩親と來て呉服屋の茶をよばれ
刀三　母親の方へはすまぬ汽車にゆれ
輝翠　兩親があつて二人にはかごらず
松郎　兩親があつたらなあと貯めた頃
かほる　ゐつゞけがふと兩親を思ひ出し
路郎　兩親が一寸いちやつく晩御飯
葭乃　兩親が手と手と觸る支那小鉢
刀三　兩親の熱燗に床屋へ行つて來る
輝翠　兩親は刻みを喫ゐとすすめて見
松郎　兩親は燐寸を馬鹿なものにせず
路郎　まだ遠いここで兩親稼ぐなり
葭乃　藻馬鹿な子に兩親が揃つてる
路郎　兩親のあの子は眼元まで涼し
　　その話母に任して親仁寢る
　　兩親へハツキリ云つて悲しませ
　　兩親の眼に物堅い向ひの子
　　兩親に逢はせて見たい情婦を持ち
　　兩親が肩身の狹ひ思ひする
　　兩親がこの子の出來た頃をいひ

樂しみより出でて

林田馬行

柳はどこ迄も私の川柳でなければならない持論の下に眞の私の川柳の完結に勵まうと思つた。そして堅く堅く決心した。

○

さもすると文句を云ふな、腕で來い、今の時代は實力主義だ。是はよく讀んだり聞いたりする事である、私も今後は何事も實力主義でなければならない事は知つてゐる。

だが然し此の言葉を直ちに川柳に當てはめるのは間違つてゐないであらうか、川柳とはそんなものであらうか。そんなものであつていゝのだらうか。

私は結果そのものを云々する前に、まづその腕で來いつと云つた瞬間に既にその人は川柳詩人としてのおのれの立場を破壞してゐるものではないかと思推するのである。

○

締切時間に縛られ題に縛られる句會の席上では自分乍ら不本意な句が出來上つ

だが然し私は、是等の人々を非難する者ではない、只是れ等の人々が先輩として大家として數多の川柳家の頭に立つと云ふことの、眞に川柳に對していゝ事か惡い事かを靜かに考へて見たい。

○

漫然と川柳を知り、漫然と川柳を作り初めた私、おだてられる儘に所謂遊び式川柳に甘んじてそれでも一時は作りに作つた私、これまでのこの不用意さを近頃私は恐ろしくなつて來た。

ほんとに恐ろしくなつて來たのだ。

藝術的良心に恥た私は結局眞の私の川柳に返らなければならなかつた。私の川

○

川柳は樂しみでいゝのだ、遊び半分で結構だ、こんなものに眞面目になつて堪まるものか、たゞ巧くこなしさへすればそれでいゝのだ　私は斯うした考へを持つて居られる川柳家が可成り今の柳壇にあると思ふ。

中には比較的眞面目さうな人は見受けるにしても、結局それは句作そのものに對する眞面目さを有する人々が多數で、矢張り結論は樂しみでいゝのだ、遊びでいゝのだとして居られる方がその過半數ではなからうか。

私の眼が間違つてゐるのだらうか。

てしまふ。それが一家吟となると漫然と句會の雰圍氣に浸つてゐるやうな氣持にはなれない。

何等題に拘束されない愉快さを味はふと共に靜かに自己を凝視する。

そして可成りの時間の後には私の本能は呼び醒まされ追々白熱の度を加へて燃燒し初めるのである。その結果生れた句が時には異端視される程の表現となつてゐても、句の眞實味と云ふ事に就いては到底句會の罷上に於ける比でない。

斯う云へば私の句會に於ける態度を責められる方があるだらう、だがこの責は受けた。そしてその人が句會に出席せられた經驗のある方なれば一度膝を交ゑてしみ〴〵この問題に就いて意見の交換をして見たい。と共に敎へをも乞ひたい。

○

然し乍ら私等は題詠に依つていつく迄も修辭なり表現の練磨を續けなければならない事は勿論であると共に、多くの久濶の柳友と對す絕好の機會であるべきこの句會をこの上なくなつかしく思ふのである。

私には是程嬉しいものはない。

句會そのものゝ意義の半分は是にあるのではないかとも私には思はれたりするものである。

○

たゞ私は題詠は決して川柳の最後のものでない事を力說したい。

もとより題詠川柳に眞實味がないとか、不眞面目に作られた句が多いとか云ふのではない。

是は只題詠萬能論者への言葉としたいのである。

○

評論は句作の前提であつて最後のものであり得ない事は題詠川柳と同一であるが、初心者に對する題詠と共に我々は評論に依つて刺戟されて行く事が必要である。

にもかゝはらず、現下の柳壇に評論らしい評論の少い現象は私等を悲しませる凡そ一流と云はれる柳誌であり乍ら、つまらぬ埋草的揚足取りに終つて一つとして評論と見なすべき程のものがないではないか。

是は誰しも感じてゐる事であらうと思ふ。

○

ラヂオが流行して來たからと云つて直ちにラヂオの文字を組入れた川柳が新しい川柳と云ふのではない。新しい川柳には新しい時代の思想が渾然と流れてゐなければならない筈だ。

內容を新しくしやうと努力する人と、皮相のみ奇に走る人とを同樣に扱ひたくないと共に、賣名策に革新川柳を叫ぶ人と、眞に眼醒めて革新運動の渦中に苦闘を續ける人とを同一視したくない。

募集句

履歴書

森東魚選

履歴書を見て貰ふ間の唾を呑み　柳暉
履歴書を見て回郷人こ知り　駒人
履歴書は書かねば損の様に書き　一閑子
明日からこ云ふ履歴書は綴れる　松雨
履歴書を持つてこわゞ〳〵扉を　盗泉
よい履歴お持ちですこ社長云ひ　止坊
履歴書へサインしたこ見て戻り　蔦歩
履歴書の初手は習字の様に書き　秀甫
履歴書へ校外生は面白し　詩竹庵
本人に來いゞ履歴書生きて來い　萬よし
履歴書こ共に社長へ廻される　柳人
顔色を見て履歴書を秘書は見せ　美の作
職業欄探すも履歴書の惱み　吐露樓
紙一枚其の履歴書を持歩き　同
履歴書を書いてそれから顔を剃り　一路
採用こある履歴書を綴じらる　同
履歴書を夫人も見るは書生なり　同
履歴書を持つて女房に默つて出　松郎
引越して來て履歴書を書くばかり　同
達筆ですなに履歴書恐れ入り　同
こもかくも出す履歴書に脈があり　乾坤
履歴書に音沙汰もなく春が來る　同
履歴書を出しその夜をよく眠り　同
履歴書がちこ物足らぬ獨學者　同
履歴書の前で本人かこ聞かれ　同

秀逸

履歴書の實印社長擧めるなり　松雨
履歴書を出して禁酒を思ひ立ち　萬よし
履歴書を見るこ成程やせてゐる　柳人

評　思はず失笑す。

斷片

梟の鳴く夜に

久流美

◇

私は神様を信じない。其代り人間を信じてゐる。だから賽錢なんてものは、めつたに投げない、賽錢――その金を人間に恵んでやれ！それはボロ〳〵のきものを纏ふてゐる乞食ではない。ごうか、こうか、その日を裕福に暮して生きてゐる人なのである。――

信ずる人――金の有る無しはごうでもよい、老いても、相應に働いてゐる人、心の美しい人、そんな人に、金を恵んで遣るべき人は屹度ある筈だ――。

◇

神様――そんなつかむここの出來ないものを信ずるよりも、生きてゐる、そして働いてゐる、やさしいゞ血も涙もある人間を、神さんの如くあがめるここが人間の爲すここよ。

履歴書の動何等もあわれなりしける
首卷もせずに履歴書持ち廻り　松郎

評　俳人橙黄子詠曰「足袋白く衣食の道を求めけり」同巧異曲此の句を得て興更に深し。

履歴書はかただけと云ふ引があり　案山子
同郷と知れて履歴書見直され　美の作

埃り

古帽子世に出る朝を叩かれる　愚劣
有つたので埃りを拂ひ乍ら見せ　隨帖
鷄の埃りを立てる事が出來　柳人
砂埃り後ろを向いて歩いて見　元山
手拭を渡して埃り脊を向け　一休
仕事衣の埃りを拂ひ飯にする　叟峰仙
男の子箒の先へ〳〵立ち　吐露樓
信號手だけに埃りがよけられず　案山子
打てば出る埃りの躍るい丶日和　しける
埃りの中の勞働車と疲呵　萬よし
けふも又砂つぼこりのまん暮れ　盜泉
鏡臺に埃りも乘せぬ年となり　南天棒
掃きよせる埃りの中で小供すね　蚊十
掃きじまひ塵取りを直角に向け　濁水
足袋はたくのは父さんが歸つて來　鳶歩

評　座五老練

(人)履歴書に士族と書いて淋しが　乾坤
(地)寶塚履歴のほかに譯を聞き　美の作

評　寶塚がちと場當り氣味なれど

(天)履歴書はたった二行の給仕也　吐露樓
(軸)履歴書は兎も角野球選手也　東魚

伊東夜叉郎選

屋根裏の埃りを蹴寢淋しがり　乾坤
古しらしい陳列棚の埃り　同
丸髷の埃り大事になでられる　默太
すべり込み埃りの中に顔が見ゑ　同
砂埃り荷馬車まともに受ける　秀哉
砂埃りだん〳〵のぎが乾いて來　同
前垂を拂つて下駄を飛んで來る　普天
書付を出せば眼鏡を拭いしから　同
ハンカチで埃り拂つてかけさせる　琴月
ちりとりの埃りの中に動くもの　同
食ふための姿埃りの中に住み　同
(人)貸家札埃りの部屋を見て呉れ　吐露樓
(地)あ此埃りは布袋さんの腹　松雨
(天)スタートは埃り立たぬさやかさ　叟峰仙

◇

私は斯ふした、心で、時折、私の生れたふる郷に、老媼（今年八十二歳）を尋ねて、彼女の壯健を喜び、彼女のひたいによる皺の幾すぢかを見て、慰めの言葉をあたへて歸るのを無上の樂みとして居る……

◇

その女は私が八ツ九ツの時分小學校の小使を勤めてゐた女であつた。

（五月三十一日）

暑中見舞の廣告を募る

▼一口金五拾錢（一頁の十分の一）▼

▼奮て申込まれたし▼

幾口でも申込んで下さい。一頁に限り金五圓、一口分の原稿は、なるべく簡單にお願ひいたします。廣告料は前金のこと。

▼申込期限七月十日迄（八月號掲載）

川柳雜誌社

振替大阪三一五一四

床上げ

床上げに床屋醫者 程口をきき 凡平
床上げの日迄途切れた日記帳 吐露樓
床上げに母の情が膳へのり 乾坤
赤飯を床上げ少し強いられる 古城山
床上げに庶務課の友がよつてくる 山月
床上げに看護婦 床へ座らされ 秀甫
床上げに親類よつて嫁をほめ 蚊十
床上げに子猫がぢやれる日が當り 屏二呂
床上げの朝 神棚に灯がともり 山美
梳髪で床上げお辭儀する 許り 竹桑
床上げに母親うすくぬつて居る 炭車
床上げが淋しく笑ふ段梯子しげる
床上げへ醫者型だけの聽診器 同
床上げて天盃受けた事を知り 濁水
床上げの散歩は妻の下駄をはき 同
床上げの噂に妾ほつとする 新坊
床上げに心をめた繪封筒 同
床上げに叔母まで醉つて歸るなり 聞路
床上げの朝は生駒へ禮にゆき 同

蛭子省二選

脇息にもたれたままのお床上げ 盜泉
床上げをした日妾宅花を活け 同

（八　容）

床上げに鯛一ぴきが生きて居る 聞路
床上げのそつとみてゐる貯金帳 露斗
床上げに隣で借る蓄音機 山月
床上げの樂しみカナリヤ孕むで 古城山
床上げにちと元結が締りすぎ 乾坤
丸くなる程床上げ着せられる 吐露樓
床上げに入きくつかふ箒なり 凡平
床上げに女將やつぱり肥えて居る 元山

昨年十月病床で本誌の課題「水枕」の選をした自分が目下健康にして床上げを選ぶは偶然と言ふよりも主幹路郎氏の意のある所を思ふて感謝に堪へない 而て二十九句の佳吟を拜見し不肖に寄せられたる三十七氏の御努力を御禮申上げます。

床上げに蕗の芽好き痩せをみせ 省二
新座敷床上げをして胴炭に 同

新戎橋より

——入社の辭に代へて——

庄萬よし

▲本當に生きるといふことは孔子にもソクラテスにも六かしいことだつた。本當だと思ふことに生きるのは天香（一燈園）も華子も酒梅も萬よしも同樣に出來るからうれしい。

▲泥棒が來やうと米騒動が起らうと三千圓當つた貴券を呉れようと水谷八重子が頬ベタを叩かうと自分は自分であるといふ一刻を持ちたいと思ふ。

▲よく無我々々といふが古今天地の間に自分の立つてゐる位置を認識したときの方がもつと有意義では何いか、これが本當の無我かも知れない。

▲眞裸の角力より眞裸の會話の方がもつと面白い。

▲好きな人は缺點のハツキリした人あまり器用にない人、少しおだて（センドウ）に乘る人、酒を呑んで醉ふ人、知

床上げに植木屋がきて長閑なり　同
因に床上げと床離れを混同せしものがあ

逢戻り

◈　松郎選

逢戻り半分仲居の力なり　炭車
逢戻り辻占一枚買はされる　屏三呂
逢戻り今度は親が承知せず　松雨
みな知つてゐるは知らぬ逢戻り　柳人
逢戻り宿替へしたいなと思ひ　聞路
兄弟子が仲へ這入つて逢戻り　青影子
逢戻りごつかで打つた二時を聞き　愚劣
逢戻りの眼に電燈の暗いこと　吐露樓
逢戻り三越で會つたことを云ひ　案山子
逢戻りした日の雨を懐かしみ　乾坤
逢戻り姐さんが來て坐り替え　東城子
逢戻りいつそ世帶を持つと極め　同
逢戻り以前の癖を叱られる　同
白粉を薄く逢戻りは出掛け　凡平
逢戻り趣味の變つたことを知り　同
逢戻りィーさんの事聞いてゐる　同

りました。遺憾ながら捨てた事を御諒承願上げます。

塚崎松郎
森田鹵翠　共選

(軸)逢戻り話寄せたり反らしたり　松郎
逢戻り同志女將に叱られる　同
逢戻り出てく仲居を淋しがり　同

選後に

逢戻りといふ題意を取違へておられる方が大分ありましたから御參考迄に、詳細に申上げると非常に紙面を要しますので簡短に説明しておきます。逢戻りとは離縁に對する復縁といふ側でなく、逢引き切れ話に對する復活を、逢戻りといふのであります。故に多く遊廓方面や、もしくは非家庭的の男女關係の情調の一つでありますすみにこう云ふ題は川柳として、句の品と因ふ点に多少難がありますが、只これより受けるところの想に對する多少の風俗、人情味を識つておくといふ、意思でありたいと思ひます。

らぬことを知らぬといふ人、好きと嫌ひを明言する人、失敗したことをかくさぬ人、正面から悪口言ふ人(それにユーモアーがあれば尚よい)芝居を見て泣く人。

▲嫌ひはこれと反對。

▲氣儘もの、各位の御指導を乞ふ。
暮れてから三里も歩く積りなり
大地は微笑むまでの夜の長いこと

川柳家の戸籍調べ

◈　係　馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(15)　大島濤明

(一)大島太平(太平に非ず)(二)濤明(三)居平、杉靜、其他四五用ひし事あり(四)大連市蘿摩町二五(五)明治二十三年一月八日生(六)滿洲土木建築業協會書記長(七)好きな句澤山あり、哲味を帶びた句

次に右選句の外に、多少字句を修正すればよいと思ふ句が次のやうにありましたので、原句と併記しておきます。

逢戻りやつばり俺に惚れてゐる　（原句）あいつやつばり

公設に湯屋に逢戻りの名染　（原句）公設に風呂屋に

逢戻りごちらか負けて酒になり　（原句）一人負けてすみ

逢戻りそれから小金貯めてゐる　（原句）少し小金貯め

言ふ事を互ひに持てご逢戻り　（原句）お互ひに持つ

逢戻り別れたことはもう言はず　（原句）別れた種を

◎輝翠選

逢戻り欺されるこは知らんなり　炭車

逢戻り心のごこか責められる　屏三呂

逢戻りなんだ馬鹿〳〵しい話　駒人

逢戻りまた心迫の種が出來　元山

逢戻りですこ近所の小聲なり　山月

逢戻りその辻までは送られる　喜多柳

馴染甲斐ない奴こ知る逢戻り　南天棒

あの女こう云ふたぞこ逢戻り　露斗

逢戻り宿替へしたいなこ思ひ　聞路

逢戻り折れて出るだけ馴れてる　青影子

逢戻りそれから少し小金貯め　突支坊

ほんこうの心ためした逢戻り　一路

破滅こは知りつゝ今日の逢戻り　點太

逢戻りごつかで打った二時を聞き　愚劣

逢戻りごちらも手がしまつて來　萬よし

逢戻りいつそ母へは打明けやう　眠聲

逢戻り趣味の變つた事を知り　凡平

あきらめた樣に逢戻りの言葉　同

逢戻りその御親切忘れかね　秀哉

かゝさんへすまない嘘を逢戻り　同

日記帳にローマ字の要る逢戻り　吐露樓

逢戻りなんにも言はず寢てしまひ　同

逢戻り少し女の氣が折れる　乾坤

四方山の話が盡きぬ逢戻り　同

尻押が今更邪魔な逢戻り　東城子

逢戻りいつそ世帶を持つこ極め　同

を好む(八)好きなタイプの女は、愛嬌、氣立、動作なご日本式の女らしい女(九)『虫けらは矢張り自分の世こ思ひ』(一〇)園碁、カルタ、繪畫、芝居、落語、その他の殆ご(一一)配遇者あり男三女二(一二)爭ひ(一三)明治四十五年頃嘲けりの氣分で川柳を作づて見た、大正三年頃から川柳に興味を持つて作り出した。

(16) 阿部悠々

(一)阿部松次郎(二)悠々(三)四迷、松時樓(四)大阪市北區松ヶ枝町七一(五)明治廿三年十二月卅一日生(六)京染悉皆洗張り湯のし業一般衣類再整業(七)極最近での好きな句は、君見たまへ菠薐草が伸びてゐる、路郎(八)實現出來ない事を書いて詮なし(九)近頃なし(一〇)園碁、將棋短歌、俳句、薩摩琵琶歌等、(一一)有(一二)數へれば面倒くさし(一三)明治四十四年中頃からこ思ふ。

(17) 加納元山

(一)加納政一(二)元山(三)瀧口久山を時折使ふのみ(四)大阪市東區安土町三西野方(五)明治三十八年三月十八日生(六)桶

逢戻り以前の癖を叱られる　同
逢戻りちゞ野氣酒を呑んだ事　松雨
逢戻り互ひにありし日を思ひ　同
逢戻り苦勞をさせてすまなんだ　同

萬よし川柳

（會報）

第十一回　鳩。キャラメル

麻生路郎先生選

(天)鳩に豆やらぬは旦那一人なり　朝一郎
(地)鳩に餌をやるビーの光るこゝ　殘紅
(人)キャラメルをくる電話聞いるる　放馬

佳作

大屋根の鳩一列に風を受け　秀哉
キャラメルの紙の遺り塩を考ゐる　月兎
鳩を追ふ後ろを乳母がつきまい　放馬
迷子はもうキャラメルで泣き止まず　萬よし

第十二回　筆。ビール

塚崎松郎先生選

(天)代筆を賴むゞ筆を汚がり　幕千子
(地)五六本幹事の知らぬビール來る　世間亭
(人)代筆に手頃な筆が見當らず　藤森

五客

〆とかくだけに帳場の筆を借り　秀哉
母の聲半分ばかり書き殘し　義治
拜む程女房の賴む筆不生　同
いろ〳〵の筆、筆立てに堅くなり　波郎
筆を持つ指に勝氣を見せてゐる　幕千子

佳作

注ぎこぼすビールの泡へ蠅が來る　乾坤
良く冷ゐたビール濡の儘で持ち　放馬
筆嚙んでからの思案が長くなり　波郎
荷造りへ落した筆に藁が付き　同
よう君も來てんかゞ生ビール　同
行水の中からビール冷えてるか　同
硯箱一本だけが書ける筆　幕千子
筆嚙んで鰤へ手鍵を引掛ける　同
妹が筆を使ふゞ細く書け　同
盃ゐビールを酌いだ宜い藝者　陶碎
荷造りの會符ゐせわしい耳の筆　盛紅
ビール樽爆彈つめたやうに見ゐ　万よし

見習店員(七)『ゴク〳〵ゞ飲むうち湯呑み底を見せ』水府『春來れば石地藏からありがたし』莢豆『内閣がごうあらうゞも蒸し暑し』五葉なゞ(八)私の許嫁のやうな女(九)今解らん(一〇)俳句(一一)ナシ(一二)ちりめんじやこ、胡瓜の漬物(一三)大正十二年十月但同年の春から時折やつて居た。

(18)　北山悟郎

(一)北山昌助(二)悟郎(三)なし(四)大阪市北區寺町停留所前(五)明治廿九年四月三日生(六)頭チョキ〳〵師(七)澤山あり(八)氣の勝つた理智の働く兎も角しつかりした女(九)今見當らず(一〇)玉突、酒(一一)本蒐集(一二)有、男兒三人の親(一三)なまこ、おこぜ(一三)大正十二年夏、

(19)　北山十字路

(一)北山熊治(二)十字路(三)なし(四)大阪市北區寺町停留所前(五)明治三十五年二月廿五日生(六)理髮師一名チョキ〳〵屋(七)好きな句澤山ありすぎる(八)慨して女らしい女(九)自信の句今思ひ出せぬ(一〇)雜種蒐集、祥樂(一一)獨身、養子の口賴みます(一二)な(一三)大正十一年夏、

川柳書架（其の十）

川柳歳事記

（安藤幻怪坊著）

▲例によつて、序文を轉載して見やう。

序

曲亭馬琴翁の俳諧歳時記は天地人の三才に亘りて殆んど叙説せざるこゝなし、此故に俳林に遊ぶの好士是を以て栞と爲す、初代川柳翁出てより茲に一百餘に及び、爾來川柳點なる句風は全國に流行するに至れり、然りといへども古川柳の特色とする所は多く江戸に於ける人事の描寫に在り、故に今人より是等の古句を見れば恰も霧を隔てゝ燈光を望むの憾みなき能はず余深く之を慨し思を古句の研鑽に潜むること多年なり、茲に川柳歳事記を草して馬琴翁の偉蹟に倣ひて以て初學入門の栞と爲すといふ。

明治四十三年六月

金港妙法山中弘誓院草堂川柳社にて

幻怪坊

こしてある。次にその例言を示さう。

▲例言

一本書は專ら初學者の爲に編みしものにして、自叙に述べし如く江戸時代の人事を紹介し、一面古句集として參考に供するを目的とせり。

一本書採錄の古句は、前句附萬句合、柳樽（初篇より二十四篇迄）川柳大全、時代狂句選、滑稽類題發句集より拔採せり、故に天保頃の句の誤つて交れることあるべし

一本書は假名遣ひ等は多く原書に依りて改めずと雖も句中「時鳥よりの此事とりやうり人」の如きは料理人を改めて讀易からしむるやう爲せり、此例甚だ多し

一本書は僅かに三年の短日月の間に編輯したるものにして遺漏砂からずと雖も之を增補するの氣力無く更に再版の時を俟つて完璧たらしめんことを期す

一本書編輯に就ては社中諸氏の助言に聽けり且つ半魔氏は其珍藏の柳多留を始めとして多くの參考書を貸與せられて業を助けられたり、余の深く感謝する所なり

一本書出版に就ては、滑稽文學社主任窪田而笑子氏の多大の周旋と手紙雜誌主任桑田春風氏の高助とに依る、茲に謹んで謝意を表す

一本書記事中誤謬の箇所あれば的確なる證左を擧げて指摘せ

られたし、其全文は川柳社發行『新川柳』に掲載して謝意を表し、更に再版の時に訂正すべし。編者識す

▲明治四十三年七月五日發行。三六横版三一六頁。定價四十錢發行所は東京市京橋區銀座一丁目一番地讀賣新聞日就社である

▲尙本書は東京市深川區東森下町十五番地山下東陽堂が大正十年十一月二十五日に讓受發行をしてゐるが、窪田而笑子氏の跋文が後頁より例言の次へ變更されたゞけで別に校正も改版もされてはゐないが定價は金六十錢に改正されてゐる。

▲かなりの努力が拂つてあるだけに古句研究家には好參考書の一つたるを失はない。

類題 川柳名句集

（佐藤紫弦編）

▲緒言

○江戸趣味を解せんこせば、輕文學の極粹たる、川柳の眞價を認めざるべからず。川柳は前句付より起り、元祿時代既に行はれて、寶曆、明和、安永、天明年間に於て尤も隆盛を極め發達せり。人情の機微を穿ち、而も諧謔輕妙にして、能く其の時代の風俗を表徵したるもの、川柳を措いて他に求むるを得ず。

○本書は同時代に於ける柳樽を主とし、編者の嗜好にまかせて蒐錄せし約二萬句の中より、更に英を拾ひ粹を拔き、八百五十題餘に分類し、四千句を精選せしものなるが、編者の不敏、必ずしも滄海の遺珠なきを保せず、大方の示敎を仰ぎ、他日稿を改むるの期あるべし

○本書の目的は、初めて斯道に志さんこする人の參考書たべく、又川柳を無下に卑しこ顧みざる一般の士に、廣く其の眞味を知らしめんこするにあれば、難解並は卑俗なる句は出來得る限り省きたれど、川柳の一班は、略此の書に依つて窺ひ知る事を得べし

○本書は文字の誤りを認するものも、多く原本に從ひ改めず季のあるものは、俳句に倣ひ季別こし、其の他人倫、人事、職業、衣食什器、動植物、釋敎、名所、異鄕、娛樂遊藝、遊里、史傳等に分類し、半ば人倫に屈し、半ば人事に屬するもの〻如きは、便宜これを改めたり。

大正五年初夏　　編者議

▲大正五年六月廿九日發行。菊半截四〇八頁。定價金一圓四十錢。東京市京橋區南傳馬町目黑分店發行

▲この記事はすべて大正十年十二月十五日

▲改裝第一版發行本による古句を類題別にしてあるため作句上の參考書としてはよい本である。

川柳塔

○　關本雅幽

樂しさは手紙の中に又手紙
潰し値にやがてなるべき名馬なり
亂雜の嬉しいものよ箸の音
お嫖緞は云はんや佛語までも讀み
差當り萬ゝは云はぬ共稼ぎ
脫かされて冷しビールを突き出され
アメリカの便り家主も待つて居る
ちよい〳〵ゝ來て恩人に喜ばれ
丸刈にしても煩悶續くなり
杉の蔭暗うなつてく有難さ

蓮池を今朝もめぐりて病上り
晝寢した旦那矢鱈に水を撒き
呑んで呑んで呑み明かさうゝ無理を云ひ
二次會にまだ折提げる家があり
月に背向けてあなたの邪推です
田植歌はずんだ方が植ね負ける

○　森田輝翠

改心が鍬の柄堅ふ握るなり
時計まだ休まず人に敎へてる
自分だけ見飽いて連れを急きたてる
入智惠をされて事件にするつもり

ボーナスの霑ひ子供まで及び
隣まだ呑んで唄つて寢させない
お天氣を見に出てこぼす齒磨粉
洗濯を眞似るも流石女の子

○　黑木莢豆

蜘蛛の糸風は南か西北か
ひよつこりとめぐりあひましよ須磨の朝
年寄はゆうづうをして聽いてゐる
いやな目をみつゝちびてく藏の鍵
弟は默つてついて來てくれる
夢みてるさきは翡翠か珊瑚珠か
淀君が笑へば大阪城霞み
慣くまれてゐるとも知らぬ蚰蜒よ
初戀をきらめくやうにみてしまひ
ソバの花よあゝソバの花よ平和

○　庄萬よし

風船屋兒の玩具ほどわつちまひ
哀愁を語る看護婦太こすぎる
萬歳の眞打客をこきおろし
忙しかつたので呑み暇で呑み直し
十十五大きな聲で負けつゞけ

登山服餘程疲れた湊町
女の子失職の父へ枕持ち
おれはおれ人は人なり禿げかゝり
セル袴電車で六法全書讀み

○　宮内一洲

失職はさて置いて出る暇を持ち
爪彈の丸窓を打つ時雨なり
約束に來れば約束あすになり
素通りにならないやうにボチを呼び

○　太田徹底郎

親切な女房に氣持こわされる
冗談を云ひ捨てにせぬ巡査なり
容体を聞き〳〵靴の紐を解き
お出入に聞けば話せる旦那なり
野袴で文樂からの使が來
眼の星を今朝も見てやる親心

○　岩崎柳路

完全に嵐が捕れた夜が明ける
カルメンのハモニカも吹く出前持
銀ブラの獨り淋しい未忘人
錢湯でちゝ氣の引ける病上り
ヘヤネットはつきり見える大寫し
江の島ゝ書いて騷がす置手紙

○　麻生茂乃

おじぎして只一本の卷たばこ
金持へ頭は下げぬ事にきめ
癇癪がつのる障子の家へ住み
おゝろへぬ父なればこそかゝる意地
欝憤は空へ消ゐるか卷たばこ
死場所は高壓線ゝ定めたり

○　林田馬行

意義のある生活二階からはじめ
天井まで悔ひが居いた午前二時
早いものもう夏服ゝなつた戀
紙屑屋通つた後の差向ひ
野線を横で儲りさうに見る
景氣ゝは別に夏帽新らになり
友達が見ても矢つ張り美人なり
病身ゝ云ふ氣話の先に立ち
うるほひを彼女にみんな持て行かれ
圖書館で啄木ゝなり子規ゝなり
算盤は戀から醒めた音を立て
あすの事はあすにして置けおい飲めよ

○　橋本二柳子

網打ゝ欄干の人涼みなり
石垣の冷ゐる時分に夜が更ける
蝙蝠だけが知る二人の涼みなり
河をへだて團扇の動く月光り
鬼ごつこ空地の方へ追はれてる
蚊取香の煙まつすぐ上がるです

編輯後記

◇未知の讀者が非常に殖ゑて來た。本社の主張がぼつ〳〵徹底して來たのだと思ふと大變愉快である。ます〳〵發展するやうに本誌の愛讀者も寄稿家の諸君も大いに御盡力が願ひたい。

◇川柳を社會に宣傳するのに「柳樽」だけではいささか心細いので現代の柳樽ともいふべき「新川柳壹萬句」を近く出す事にした。初心の者の參考に便するため類題別にしてあるから充分期待して貰つてもいゝものが出來ると思ふ。着手したのは大正九年である。最近の百萬石」で私が俳句を蒐めたものを見て、これが川柳だつたらどんなに嬉れしからうと書いてあつたのを見たので、一寸發表することにした。大抵の雜誌はあつめてゐるが私の手許にとてもあるまいと思はれるやうな雜誌や句集を出してゐられる方で採錄を希望されるならば至急に見せていただきたい。（ただし大正元年以後のもの）

七月例會

日時　七月十八日午後六時
場所　大阪市南區清水町停留所西入

端の坊

兼題「社長」三句　路郎選

會費　金貳拾錢

句會に出席したことのない人でも御遠慮なくいらつして下さい（幹事）

◇別稿の通り六月四日の夜に川柳「りりちやんの會」を開きました。久しぶりに愉快な會合をした。今後時々こうした集りをやつて見たいと思つてゐる。

◇六月十四日に開かれる函館川柳社の川柳大會へは花童子氏との約束もあつたので是非共出かける積りで青森行きの汽車の時間まで取調べてゐたのに出立の十一日になつて仕事の關係上遺憾ながら中止しなければならぬことになり、非常に好意を寄せてくださつた函館川柳社の同人の方々や特にその衝にあたつてゐられた花童子氏に對して誠に申譯がないと思つてゐます。他日必ずお詫びに出かけることがあらうと思ひますから今回の違約は特におゆるしを願ひます。

◇六月十五日の夜、神戸新聞社の神戸柳壇（紋太氏擔當）主催の川柳大會がありましたので本社からは私が出席いたしまして駄辯を弄して來ました。當夜は仲々の盛會でした。

◇同人高橋古城山氏が十三日に新妻を迎へられました。いづれ嬉れしい句を見せつけられることとは思ひますが一寸御披露いたして置きます。

◇同人黑木莢豆氏は身心靜養のため二箇月餘り鄕里香川縣に歸つてゐましたが、健康が快復したので顏を見せました。

◇各地の柳友諸兄から面白い寄せ書や旅行中のお賴りをいただきましたが紙面がないので遺憾ながら發表出來ません。御好意は深く感謝いたして居ります。（路郎生）

柳壇の權威　木村半文錢氏著

代表句選 川柳の作方

菊判半裁洋製箱入
三百六十餘頁
定價壹圓貳拾錢
送料（内地十二錢 領土三十錢）

（一）川柳とはどんなものか。（二）川柳は面白い。作つて見たいが怎うしたら作れるでせうか。（三）川柳を作り始めたが佳句が出來ぬ。どうしたら佳句が出來るでせうか。（四）川柳は相當作れるやうになつたが、川柳を益々深く研究するにはどうしたらいいでせうか。

斯うした疑問を本書で解決して下さい。

文章は平易、解釋は親切、しかも透徹。

初心者や新道研究者のため絶好の參考書であります　是非御一讀を！

發行所　大阪市東區住吉町十二番地八　弘文社　電話東二一三八番　振替大阪七一二九七番

▲道頓堀川にかゝつた日本橋を南へ渡つて半丁も行かないところにある古本屋です。

▲主人公藤堂氏は愉快なおぢさんです。とても古本屋のおぢさんとしては珍らしい人です。

▲古本を漁りながらいろんな話をしてゐれば道頓堀を歩いて來た感じが流れるやうに出て來ます。

▲こゝの特色としては、どんな本でも蒐めてあること、値段のところはまかしておいても安心して買へると云ふこと買ふとか買はぬとか云ふことを問題にせずに愉快に本を見られるといふことです。

▲せいぜい主人公とお馴染みになつて下さい。探して貰ひたい本があれば頼んでおきさへすれば出來るだけ便宜を與へて貰へます。（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第二卷第九號課題

七月十五日締切

（各題二十句以內）

▼銀行　本田溪花坊選

▼泡　麻生葭乃選

▼工事　井上刀三　原史風　共選

第二卷第十號課題

八月十五日締切

（各題二十句以內）

▼祭　淺井五葉選

▼立膝　安川久流美選

▼夏服　關本雅幽　太田一聲　共選

毎號募集

▼近作柳樽（五十句以內）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）　編輯局選

▼文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵稅）

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓（共）

廣告料

本誌の廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十四年六月廿五日印刷　第二卷第七號

大正十四年七月一日發行　（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸二郎

印刷所　大阪市東區農人町二丁目七番地　藤本兄弟社

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋

（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田

（金澤）石井　（松任）三須　（函館）石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　井上刀三
原史風　林田馬行
橋本二柳子　二木幸堂
西垣松雨　徳田双柳
太田徹底郎　太田一聲
河南放馬　龜井花童子
高橋かほる　高橋古城山
高見柳骨（入營中）　竹内多聞
塚崎松郎　黑木莢豆
矢田右大臣　柳川洲馬
駒井美の作　麻生葭乃
佐々木默闇　宮内一洲
庄萬よし　平井光太樓
森田輝翠　關本雅幽

第一支部　大阪市港區八條通二丁目南小路
幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市北區南同心町二丁目四五〇
幹事　原史風
第三支部　岸和田市下野町四一九
幹事　太田一聲
第四支部　大阪市港區鶴町四丁目十三號埋嵐山方
幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市東區餌差町二二一番地
幹事　駒井美の作
第六支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園
幹事　佐々木默闇
第七支部　大阪市東淀川區南濱町一八二
幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市上中島町一丁目四二
幹事　宮内一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路
幹事　柳川洲馬
第十支部　大阪市外豐中榮通二丁目石賀方
幹事　林田馬行
第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
幹事　岩崎柳路
第十二支部　函館市青柳町五〇
幹事　龜井花童子
第十三支部　大阪市住吉區安立町五丁目一二二
幹事　徳田双柳
第十四支部　朝鮮仁川仲町二丁目八
幹事　矢田右大臣

十四字詩

（武川玉より）

ひとりに見せる髪に半日
問はれて見れば見殘した京
旅とおもはず飛脚出て行く
盃ばかりさせておく罪
寒い形に出來るこんにやく
忘れたやうな寺の元日
言はぬりんきを大針に縫ふ
妾のりんき手むかひの内
足を洗つて聞けば買水

二人にならぬ内は主徒
やつと盗んで來ると散る蓮
時計のうそも客のもてなし
七生までといふ方が泣く
呵られに立つ船の眞中
乳母の暇は夜の内に出す
盧生が夢の覺めて書出し
四十の妻のちんまりと寢る
勝つた喧嘩に詫をする乳母

大阪十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大阪十四年六月二十五日印刷　大阪十四年七月一日發行
第二卷　第七號（第十八號）
定價金參拾錢